

# 原爆文学研究会報

第四〇号

原爆文学研究会 二〇一三年二月

再確認 昨年末の研究会の数日前に、勤務先の高校の教員たちと雑談しながら原爆文学研究会のことを話す機会があった。「原爆文学研究会？

どういったことをやるの？」とこの時に限らず大概聞かれるので、私はいつもこの研究会の発起人である花田俊典氏の論考「原爆言説の日本的形成」（「原爆文学研究1」）の要旨を簡潔に紹介することになっている（原爆を巡る言説には「アメリカ」という主語がない）。

しかし私の紹介の仕方が悪かったのだろう。今回再読して気づいたのだが花田氏の論考の本質からは外れた「アメリカを訴えられず、被爆者・日本人は被害者であった」という単純な印象を私は与えてしまっていた。教科書の編纂もしている日本史の教員が「日本人が被害者であるなんて言えるのですかね」と疑義を挟んできた。私はうまく返答できなかった。確かに日本は十九世紀的なり方でアジアを侵略したからだ。いま日本と領土問題で揺れる中国や韓国、そしてその他の国々に原爆文学研究会をどう伝えたらいいのだろう（最近、原文研に留学生の参加が少ない気がするが何故だろう）。

そんなことがあった数日後、研究会で篠崎美生子氏が井上ひさしの「父と暮らせば」という劇について言及されていた。興味があったので後日その劇を読んでみると「前口上」としてこんなことが書かれてあった。

「ヒロシマ、ナガサキの話をする、いつまでも被害者意識にとらわれてはいけない。あのころ日本人はアジアにたいしては加害者であったのだから」と云う人たちがふえてきた。たしかに後半の意見は当たっている。アジア全域で日本人は加害者だった」とした上で、こう断言する。／しかし、前半の意見にたいしては、あくまで『否！』と言いつ

づける。／あの二個の原子爆弾は、日本人の上に落とされたばかりでなく、人間の存在全体に落とされたものだと思えるからである。あの時の被爆者たちは、核の存在から逃れることのできない二十世紀後半の世界中の人間を代表して、地獄の日で焼かれたのだ。だから被害者意識からではなく、世界五十四億の人間の一人として、あの地獄を知っていながら、『知らないふり』をすることは、何にもまして罪深いことだと考えるから書くのである。（『父と暮らせば』 一九九八 新潮社）。どんびしゃりだ。高橋敏夫氏（『井上ひさし 希望としての笑い』 二〇一〇 角川SSC新書）によればこの作品は仏英露独伊中などの諸国語で翻訳され、海外公演も多いという。

人類が核を持つてしまった以上、全人類に関係があるという井上の視点は有効だ。今まさにフクシマ（原発事故）の問題を日本だけでなく、世界が目目している。そしてこうした視座が既に原爆文学研究会には通有なことなのを恥ずかしながら改めて知った。次回の原爆文学研究会の会場は福島になるという。どういう議論が展開されるのか実に楽しみである。

（上村周平）

## 第四〇回 原爆文学研究会報告

二〇二二年一月二三日（土）に第四〇回研究会を開催しました。

篠崎氏の発表に対しては「被爆女性の物語という『黒い雨』を思い浮かべるが、今回の発表のどのように位置づけられるか」、「他のいろいろな要素もあるなかで、すぐに親子の権力関係といつてよいのか」、「リフトンの言説の歴史化をどう考えるか」等の質疑があり、永川氏の発表に対しては「ビガートの先行研究とどのような関係があるのか」、「老人が登場する場面で『』という語が批評性を持っているのか」、「ハーシーのプレテクストとして考えるなら、雛形を留意したのがビガートだといえるのではないか」等の質疑がありました。



また、合評会では後藤みな子『樹滴』を取り上げました。長野秀樹氏が報告した後、参加者が自由に感想や意見を述べ合いました。

### ◇ 研究発表 1

## 〈内面の発見〉と罪悪感

——原爆の語りと〈娘〉——

篠崎 美生子

文学を中心とする原爆の語りの中には、生き残った者の「罪悪感」がしばしば書き留められている。原爆の語りの中において、誰かを救えなかったこと、或いは生き残ってしまったことへ負い目は、所謂「サバイバーズギルト」一般では片づけられないほど強烈だ。

ただし、概観したところこの「罪悪感」は、死者が生き残った者の親（などの尊属）である場合に強く、逆に原爆で子を失った親の場合には、子どもの死をその後の人生のために都合よく解釈する語りがしばしば見られた。就中、息子の死は娘の死よりも悼まれたが、その場合も、生き残った娘に過剰に依存することで親がその後の人生を継続していくケースが複数あることが見て取れた。原爆の語りの中にも、親子の権力の非対称、ジェンダーの非対称は反映されているのだ。

このパターンが当然のことのように読者に受け入れられてきたことは、井上ひさし「父と暮らせば」、こうの史代「夕風の街 桜の国」の大ヒットからも窺える。「父と暮らせば」は、自分を生の世界から遠ざける（＝「自己疎外」）ことで慰霊を果たそうとする美津江が、父の亡霊によって〈回復〉を得る物語だが、これも見方を変えれば、別の死者の代弁者となるだけで〈疎外〉は継続中なのだとも言える。「夕風の街 桜の国」の皆実も、見殺しの罪悪感、共依存的慰霊、母の慰めの全ての役割を一人で負って死んでいく娘である。

原爆の記憶が薄れる中で、原爆文学はこうして娘を〈疎外〉する物語としてのみ共感を確保しているのではないか。その背景には、「いざれば他家の人」でしかなかった娘が（母）親にとって最良の「耐久消費財」（上野

千鶴子)に変化していった事情も反映しているだろう。支配され、コントロールされ続けながらも親に対して申し訳ないと思いつけずいられない〈娘〉の思いが、原爆の語りと現代の読者をつないでいるのだ。後藤みな子「樹滴」なども含め、比較的新しい原爆文学がしばしばアダルトチルドレン小説の形をとる(と解釈できる)のも、そのためかもしれない。

◇ 研究発表2

## あるアメリカ人記者の痕跡

— Homer Bigart 「ヒロシマルポ」について

永川 とも子

ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』が一九四六年八月三十一日に『ニューヨーカー』紙に発表されたことは、全米を揺るがす一大事件であったということに間違いはない。この作品発表に対する評価は、「それまでのヒロシマ・ナガサキ報道が明らかにしてこなかった被爆地の一面」に光を当てた作者の試みに対して与えられたように思われる。果たして、「それまでの被爆地報道」においては、米国民は被爆地のことをどの程度知っていたのだろうか。実は、ハーシー以前にも相当数の報道関係者が被爆地入りし、現地ルポを執筆したという事実が報告されており、この点を考慮すると、米国民は極めて初期の段階で被爆地の状況に関し無知であったとは言い難い。

それでは、被爆地を見た報道陣達は、如何なるナラティブを使って被爆地の物語を作り上げたのか。また、広島・長崎、そして被爆者達は彼らによって如何に表象されているのか。本発表ではこの点を解明する一つの手段として、「ニューヨークタイムズ」の記者であったホーマー・ビガート(一九〇七—一九九二)が一九四五年九月五日に寄稿したルポルターージュを扱い、それを分析することで彼の「原爆投下」という事件に

対するスタンスを検証した。分析に際し着目したのが、ビガートが被爆地の物語を語る際に「私たち」という人称を一貫して採用している点、及び「クリスチャンの老人」に対する書き手の「まなざし」である。前者については、まず、このテキストが執筆された一九四五年九月当時、被爆地ルポを執筆するために派遣されたプレスツアアのメンバー達と同じ内容を書かなければならなかったという「圧力」が存在したという史実を前提とした。その抑圧の結果として、広島物語には欠落が生み出されてしまい、それが書き手の不服の原因となつたのではないか。この点を踏まえると、一人称複数形である *we* を採用した裏側には、他の特派員たちと一種の共犯関係を結ぼうとした作者の姿が暗示されているのではないかという可能性を提示した。後者に関しては、被爆者でありながらも米軍関係者に好意を示す一人のクリスチャンの描写の背景には、憐憫とも贖罪ともとれる書き手の交錯した感情を読み取ることができないのではないか、という一つの見解を示した。

以上が今回の発表の概要であるが、オーデイエンスの方から様々な貴重なご指摘・ご意見をいただいた。とりわけ、この手のテキストを扱う際には、時代のイデオロギーから書き手の政治的屬性に至るまで、外部的コンテキストを幅広く検証することの重要性を痛感した次第である。

◇ 合評会

## 『樹滴』合評会報告

長野 秀樹

後藤みな子さんの最新作『樹滴』(平24・7、深夜叢書社)は二〇〇六年七月、同人誌「すところんぼり」創刊号に掲載された「連作一」から二〇一〇年四月発行の第八号に掲載された「連作八」が収められている。「連作」となっているが、主人公は一貫して「香子」である。長崎で兄が被爆死し、その後、母は精神に異常をきたす。南方に軍医として、出

征していた父は、帰還の後、大病院で学部長、学長と出世の階段を上昇していく。このようにまとめれば、このストーリーは、文藝賞受賞作「刻を曳く」（「文藝」、昭46・11月号）以来、「炭塵の降る町」（同、昭47・8月号）などで、繰り返し、語られてきたことがわかる。

大きく異なる点は、「刻を曳く」「炭塵の降る町」の主人公は「私」という一人称で語られているという点である。「私」から「香子」という三人称への転換の持つ意味を考えてみたいというのが、報告者のねらいだったが、それは十分ではなかったように思う。「桐の露地」（「燭台」三号、平14・9月）の主人公も既に香子と名乗っている。

これは、研究会の後に気づいたことであるが、たとえば中上健次の「彼」としか呼ばれなかった主人公が「秋幸」という名前を獲得するのは「岬」であるが、語り手は「彼」としか呼ばない。主人公を「秋幸」と呼ぶのは、登場人物だけである。それが、「枯木灘」では、語り手も「秋幸」と主人公を呼び始める。中上の三人称から固有名詞へと移り変わる呼称の問題は、すでに多くの論があるが、こうした論も参考にしながら、「私」から「香子」への転換の問題は考えられるのではないかと、今、考えている。

## 彙報

### 第四〇回 原爆文学研究会

- 日時 二〇一二年二月二三日（土） 一三時より
- 会場 九州大学西新プラザ中会議室
- 研究発表

発表1 〈内面の発見〉と罪悪感——原爆の語りと〈娘〉

篠崎 美生子

発表2 あるアメリカ人記者の痕跡

——Homer Bigart 「ロシマルポ」について 永川 とも子  
合評会 後藤みな子 『樹滴』 (報告) 長野 秀樹

## 機関誌 「原爆文学研究」 第一二号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一二号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一三年九月中旬、データファイル（Wordか太郎）を添付しての投稿の場合は同年九月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一 福岡大学人文学部 中野和典研究室

## 編集後記

会報四〇号をお届けします。例会の開催も四〇回目となりましたが、これに先立って一時より世話人会会議を開催しました。世話人会メンバーについて、例会について（春、夏、冬の年三回開催、夏は二日間としシンポジウムやフィールドワークを企画する）、「原爆文学研究」十二号について（二〇一三年一〇月締切）、ホームページについて（「発足の辞」の他に会の案内文を掲載する）、その他の議題について話し合いました。その中で発案された福島開催が、早速次回の研究会で実現します。話には聞いていてもまた福島に行ったことがない私ですが、これを機会に会員のみなさんといろいろお話できればと考えています。（楠田剛士）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) / e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>